愛媛大学教育学部紀要　第57巻　227 ～ 236　2010

酒に関する地理学的研究の現状とその課題

（教育学研究科修士課程）　臼　井　麻　未
（教育学部地理学研究室）　張　　貴　民

Studies on the Geography of Alcohol: Present State and Issues

USUI Mami *and* ZHANG Guimin

（平成22年６月５日受理）

Ⅰ．はじめに

酒は，歴史も非常に古く，世界各地に存在するものである。酒の研究がまず関わるのは，醸造に必要な環境や微生物，技術といった自然科学的な面がある。酒に含まれるアルコールが人体に及ぼす影響として，医学的・社会学的な面における研究もなされている。原料に着目すればその原産地特有の作物に大きくかかわることから，各地の農業との関連を分析されてきた。さらに現代において酒は単なる嗜好品としてだけでなく商品としての姿も持っており，そこでは生産・流通・消費などの経済的，経営的な面における研究がなされている。

その上，先述したように酒の歴史は古く，起源は古代エジプトやメソポタミア文明にまでさかのぼることができるため，その歴史に関する研究もある。そして酒の発祥は宗教に基づくと思われるものも多く，酒自体が各土地に文化を根ざしており，文化人類学的視点においても研究がなされている。このように，酒の研究とのいうものは，文理問わず広く様々な分野からアプローチがされてきた。

しかし，アフリカや東南アジアといった地域の地酒の報告となると，きわめて少なく，また文化的な面を中心に捉えた研究というのは，まだまだ未開拓な点が多いことが指摘されている（石毛，1998）。このように，酒は様々な面からの追及が可能であり，人々にとって身近な存在でありながら，研究対象としてとらえる分野が主に自然科学や経済学であったり，対象地域がヨーロッパや東アジアなどに偏りがちであり，いまだ発展途上にある題材なのである。しかし酒はその歴史の古さから，人の自然な営みの中で発生した，文化的産物がもとともいえる。

では，地理学における酒の研究というものは，どのようなものであろうか。酒はよほど未開拓な文明でない限り，世界各地に存在している。歴史も古く，その土地特有の作物を原料とする場合が多く，製法や醸す菌にまで各地によって違いがあり，味や香りや色，アルコール度数がその地域特性として表れている。様々な分野を包括的にみることができる地理学という分野では，酒についてどのようなテーマで研究がなされ，どのような傾向が示されているのであろうか。

本稿では，様々な分野から研究がなされている酒の研究の中でも，地理学的研究を整理し，その傾向を分析，考察し，その研究課題を指摘することを目的とする。研究方法は，日本語文献を対象として，CiNii・地理系雑誌の論文目録から，酒・ワイン・ビール・焼酎・地理をキーワードに検索し，該当したものを年代別，酒類別にまとめ，分析する。したがって，主に戦後に発表された研究成果を取り扱うこととする。ただし，従来の研究の中でコラム的・要旨などに当てはまるものに関しては，触れる程度にとどまる。

以下のⅡ章では，年表化した文献リストを，研究の対象となっている酒類や関わりのある分野の特徴・傾向などから４つの時期に区分した。まず，戦後から1981年までは第一期，1982年から1992年までは第二期，1993年から2001年までは第三期，そして2002年から現在までは第四期とする。さらに，Ⅲ章では，酒類別，分野別，研究者別に考察していくこととする。

Ⅱ．地理学における酒の研究

１．概要

上述した方法による検索で，作成した論文のリストが表１である。この章では，この文献リストをもとに，時代ごとにおける研究傾向を追っていくこととする。なお，先述したようにコラム的・要旨と表記したものはあまり分析の対象とはしない。そして，実際に精読していないものも，リストには挙げていることを記しておく。

表１は，検索によって該当した論文を，清酒･ビール･焼酎･ワイン･その他と酒類ごとに分け，さらに著者名･関連分野・発表形態を年代別に表化したものである。

２．第一期（戦後～ 1981年）

まず確認できた論文の一番古いものとしては，川本（1951）の「南部酒造出稼ぎの質的吟味論」である。その後時間を空けて，1976年に雑誌『地理』において酒の特集が組まれている。これらは主に日本における酒と文化に焦点を当てており，民俗学的視点から述べているが，特集ということもあり，研究発表というよりはコラム的なものに近い。

その後，松田（1978）による酒造出稼ぎ労働をテーマとした研究が現れ，次に杉原（1978）の地理教材研究として伏見酒造業を取り上げたもの，井上（1980），白石（1980）による酒米の合同販売についての研究などがある。そして，唯一ビールとワインに関する品田（1968）の研究が見られるが，それ以外の清酒以外に関わる地理学における酒の研究というものは見受けられなかった。

このように戦後初期の研究は，酒について地理学ではあまり本格的な研究対象とはされておらず，主な酒類もほぼ清酒にとどまっており，主体的なテーマは，酒造出稼ぎ労働の需給分布や兼業状況といった，社会学的，経済学的，そして農学的分野に関わるものであり，酒そのものを直接的に扱った研究は少ない。

そして酒造出稼ぎ労働力についての研究が多くなされたのは，主に時代背景として日本が高度経済成長期を迎えたことと関係がある。それは今までの日本の経済体制が変化し，酒造業界自体が再編成されており，清酒生産量も1974年あたりをピークにその後は減少して行ったこともあり（図１），出稼ぎ労働者である杜氏も続いて減少した時期でもある。松田の論文においても，そのことは指摘されている。このようなことから，この時期は清酒業とその労働者について見直され，研究が多く現れているのであろう。

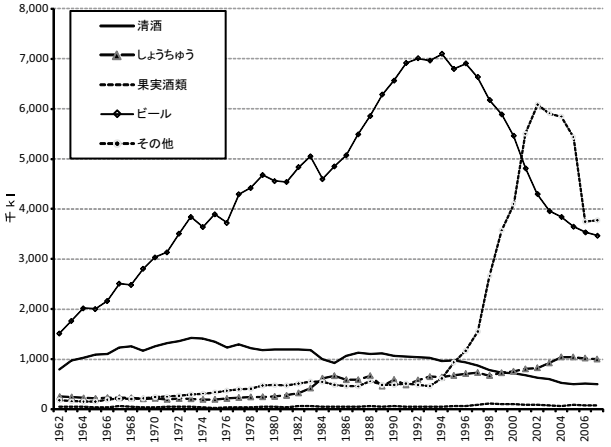

図１　日本における主な酒の製成数量
（国税庁統計データを元に作成）

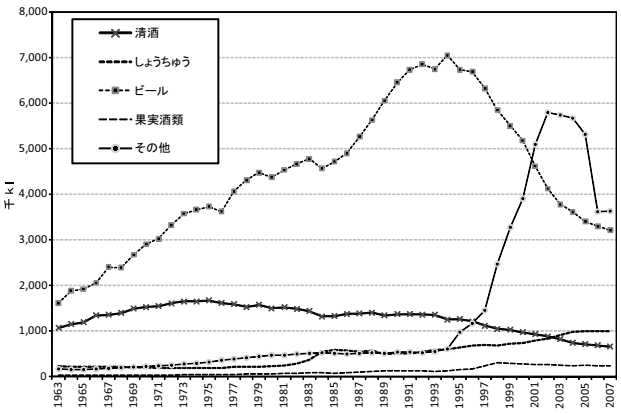

図２　日本における主な酒の消費数量
（国税庁統計データを元に作成）

３．第二期（1982年～ 1992年）

1980年代初頭に現れるテーマが，日本における地方のワイン生産についてである。多田（1983）が甲府盆地におけるワイン業，菊池（1983）がブドウ酒造業の展開とその存立の実態について検討しており，佐々木（1984,1990）が山形県や岩手県のブドウ栽培とワイン業について検討している。山梨県のワイン産業に注目されているのは，特に勝沼町が古くから殖産興業政策によりブドウ栽培を開始し，民間に移行してから発展してきた土地でもあるためである（多田，1983）。そしてこのころは日本における第二次ワインブームが到来した後ということが多田の論文（1988）でも述べられており，これ以降, ワインに関する研究が増えていくこととなる。

ちなみに第一次ワインブームは，1971年頃である。そのほかにも，カリフォルニアやニュージーランドなど，他国におけるワインについても取り上げられている。

清酒に関しては，伏見（石川，1989）・灘（上村，1989）・知多（篠田，1989）などの，主要な酒造地域の発展についての研究が発表されている。これはそれぞれ，伏見の明治以降の急激な発展の実態と原因についての検討，灘は日本酒造業の展開において果たした役割・機能の検討，知多はその酒造業が愛知県の主力産業でありながら重要性が認識されていないことへの指摘としての取り上げという内容になっている。そして中村(1989)によって，近代酒造業の動向をマクロな視点での数量による展望がなされている。

そのほかには，アフリカのモバ族の酒造りとそのための容器である甕の文化についての研究（森，1990）や馬乳酒の研究（小長谷，1991），韓国における飲酒について（崔，1993）など，日本以外の酒についても研究対象として登場してきている。また，岡本（2001）によって近代のアメリカにおける酒場の盛衰についての研究もなされている。

このように，清酒も経済学的視点によって，酒造業に関して本格的な研究が行われるようにもなったが，発表されている学会誌は社会経済史学であり，地理学として全面的に取り上げられているわけではない。しかし，出稼ぎ労働者だけでなく，酒造業とその主要地域の研究が始められたことは，酒の研究としてテーマの幅が広がり意義は大きい。そして，ワインや外国の地酒といった，あまり身近ではなかった酒についても研究されるようになってきたことが，この時期の特徴であると言える。特に外国の地酒に関しては清酒と違い，伝統文化を中心に取り上げられている。しかしビール，焼酎はいまだコラム的なものの発表にとどまっており，本格的な研究は地理学においてあまり見られない。ビールなどは他酒に比べ，大量に生産されているにもかかわらず，あまり研究対象としてみなされてはいないのである。

４．第三期（1993年～ 2001年）

この時期は前期に比べ，清酒造業についての研究テーマの幅が広がっていることが，特徴としてあげられる。まず工藤ら（1993）による新潟上越地方の清酒造業の実態について，八久保（1994）による大正期の会津酒造業について，高木（1997）による長岡地域の清酒造業の雇用形態変化についてなど，様々な地域について研究がなされるようになった。そして清酒造業の地域構造や地域特性，形成過程といった，経済学的視点が主体でありながらも、より地理学的な研究が発表されているのである。さらにこの時期は，主に関東圏の清酒造業について青木（1996，1997，1998，2000）が一連の研究を蓄積していくことも，特徴としてあげられる。

この時期，ビールについては，ビール工場の生産・物流体制の変化についてまとめられた研究（箸本，1996）や，ビール業界の動向（堤，1999）など，日本のビール産業に対する本格的な研究も見え始めている。特に丹治（2001）の日本のビール業界が大手企業の寡占状態になった過程ともいえる，大日本麦酒の経営の展開ついてまとめられていることは，大きな研究蓄積といえる。また，柴田（2001）によって地ビール産業についての研究もみられ，ビールを対象とする研究にもやや幅ができ始めている。

そして八久保（1996，1998）によって焼酎産地の形成について一連の研究発表がなされていることも，特徴としてあげられる。この背景には，本格焼酎のブームがまず1985年度にピークに達し，バブル期に一時伸び悩んでいたものの再び緩やかに生産量を上昇していく，第４期ブームともいわれる時期である。その理由はあまり深く問われてはいないが，本格焼酎と呼ばれる単式蒸留焼酎でなく，以前は甲類と呼ばれていた連続式蒸留焼酎の生産量増加もあると考えられる。連続式の方は，消費量が年々増加しているチューハイや発泡酒などの，混成酒の原料としても使われるのである。

また，ワインに関しては，多田（1996）が再び山梨県を例としたワインによる町おこしを取り上げている。そのほかにもワインを対象とした研究は見られ，第二期のように対象地域もフランス，ハンガリー，南アフリカ共和国，ザンビアと多岐にわたっている。

その他においては新羅使に対する給酒について（中野，1996）や，文献中の馬乳酒の名称の違いに注目した研究（石井，1997），ヨーロッパにおける酒類の生産・消費についての研究（呉羽，1999）と，なかなか多彩なテーマがでている。

バブル崩壊後により清酒の生産量が落ち込んでいくの

もこの時期であり，清酒造業の経済学的視点からの見直しともいえる研究が増えていることは，偶然ではないであろう。そして逆に清酒に生産量も消費も追いつきつつある，焼酎に関心が寄せられ始めている。ワイン研究に関しては二期と同じく山梨と外国のワインについて幅広く取り上げられているが，研究量は減少している。

5．第四期（2002年～　）

2002年以降も，清酒造業の研究は続けられているが，秋田県山内村の酒造出稼ぎ（長谷川，2004）や，灘五郷の近代酒造業の変遷（塩見，2008）など，対象地域が異なりはするものの今までと類似するテーマである。しかし時代ごとに経済体制も変化し，清酒に関してはなおも生産が減少にあることから，その原因の解明や今昔の比較のために，研究の蓄積は必要であると言える。

ビールの研究に関しては，一件の論文しか見つけることができなかった。しかし国内ではなく，中国のビール産業の発展と立地について書かれた論文（柳井・于，2003）である。経済論集に組まれてはいるが，地理学におけるビールについての研究で初めて海外に目を向けた本格的な研究といえるのではないであろうか。その論文によると，中国ではその消費量が日本より上回っており，既存のビール生産国の停滞や減少が進む中で，新興ビール生産国として1990～2000年にかけての世界増加分の半数のシェアを占めるほどであるという。身近な国の生産と消費に関して比較が可能であれば，日本のビール産業回復の手立てともなり得るため，このような研究は非常に重要な意味を持つと考えられる。

ワインに関してはまた,主だった研究は見られないが,雑誌『地理』において，以前の日本と酒のようにコラム的ではあるが,「地ワインと風土」として日本のワインについて特集されている。主に大手企業ではなく，ワイナリーなどによる地場産業としてのワインが取り上げられており,その町おこし的性格に焦点が当てられている。これらを見ると，ブームが去った今でも，日本におけるワインはビールと同じ外来酒でありながら，身近な酒としてあまり浸透していないように感じる。

その他において特筆すべきことといえば，宮崎県を対象とした飲酒嗜好の地域性についての研究である(時吉・中村，2004)。今までにありそうでなかったテーマであるが，酒の文化的研究に嗜好の地域性はかかせず，むしろ地理学でしかできないテーマであると考える。

前期に比べ，どの酒類においても研究の発表が滞ってきているようにも感じる。しかし中国のビール産業や飲酒の嗜好性といった，新たなテーマも出ている。この時期は清酒だけでなくビール産業も，もとい酒造業全体の生産が落ち込んでもいるため，過去の酒造業に立ち返りまた外へ目を向けることでその課題と解決策を講ずるのも必然であるのかもしれない。

以上，各時期における研究の特徴を概観した。これについての分析・考察は，次章で行うこととする。

Ⅲ．分析・考察

1．分野別の分析・考察

この章ではⅡ章における年代ごとの概略を踏まえ，戦後からの製成数量統計をもとに作成した図1，消費数量をもとに作成した図2も参考にしながら考察していくこととする。用いたデータがそれぞれ1962年，1963年からとなっているのは，それまでの果実酒類の統計がウィスキーなどと統合されており，それ以降に項目が分化しているためである。

まずそれぞれの研究が関わっている分野ごとに分析・考察していくこととする。主な分野は，多くかかわっている順から経済学，農学，歴史学，社会学，文化人類学などである。

経済学的テーマが多い理由として，どの酒類においても酒を商品としてとらえ，酒造業の形成過程，構造，発展について地理学的視点から分析するという研究が多数あるためである。特に清酒の研究はほぼそれに当たる。つまり現代において酒とは文化的産物ではなく，経済的産物であり，その商品的価値に視点が偏りがちであるということを指摘できる。

農学的分野では，元々酒というものはその原料に深く依存するものであり，特に醸造酒は原料立地型産業となる傾向が強いため，酒米やブドウの栽培が研究に深く関わるものも多い。例としてあげられるのが菊池（1983）や井上（1984）の研究で，主に栽培形態についてやその分布，または農家と酒造元との取引の現状などを扱ったものがある。

歴史的分野は，そのものを扱った歴史地理学的視点というわけではなく，主に経済学的視点による研究に付随

する形で，酒の生産の展開や変容に関わってくる。例としてあげられるのが，酒造業の数量史（中村，1989）や伏見酒造業の発展（石川，1989）などである。先述したように酒自体の歴史は古いものの，扱われるのはもっぱら各地域，時代の酒造業がいかにして発展したかということであり，遡られるのはだいたい近世までである。例外として新羅使に対する給酒に関する研究があるが，発表されているのは歴史雑誌であり，あまり地理学的とはいえない。

社会学的分野は，現在は減少している出稼ぎ労働者を焦点にあてた研究の面で関わっている。松田の論文（1978）にもあるように，農民出稼ぎ者の数とその内容は，高度経済成長期を通じて大きく変化しており，中でも酒造出稼ぎは特殊である。幕藩体制時代から杜氏集団として一定の醸造技術を習得し，地縁的結びつきを持ち，冬期間のみの出稼ぎとなる。そして戦前に比べ，戦後高度経済成長期に激減してしまい，後継者難に見舞われていた。よってこれらをテーマとした論文が，一期においては数多く存在したのであるが，現在においても後継者難が解消されてはいない。それが出稼ぎとしてではなく，杜氏が専業化されてきたことにより，自然と扱われなくなったものと考える。

文化人類学的分野は，地誌的な外国の酒文化研究等でそのかかわりが見られる。しかしモンゴルの馬乳酒やアフリカの地酒など，研究対象の幅は狭い。地理学において各国の酒の地域性や，その比較などを行うことには意義があると感じられるが，あまり関心が寄せられていないようである。

最後に政治学的分野は例外的であるが，禁酒政策による影響についての研究等でみられる。しかしこれはどちらかといえば，歴史分野に深くかかわっていると思われる。

２．酒類別の考察

主な酒類別にみると，清酒についての研究が最も多い。やはり日本独自の地酒として，研究対象にされることが多いのであろう。次いで多くみられるのは，ワインである。海外におけるワインについてばかりでなく，主に甲府盆地におけるワイン生産を中心とした，日本のワイン生産についても研究がなされている。その次に多いのがビールであり，そして焼酎，雑穀酒などの世界各地の地酒，総合的に見たものと続く。

全体的に主に研究されている酒は清酒であり，テーマは酒造業に関することが主体的である傾向がわかった。その理由としては次のことが考えられる。清酒が日本独自の酒である，という理由ももっともではあるが，その地酒的性格の根本である原料（水･米）や酒造地の気候，歴史の古さ，主に中小零細企業において造られているといったことから，地域それぞれの発展や存立の違いなどの特性を見出しやすいためではないであろうか。いずれにせよ，清酒自体がもつ地域性というより，酒造業のほうに視点が偏りがちともいえる。すなわち先述したように今日において清酒は，日本人の文化的産物というより，経済的産物としてその商品価値の方が重視されているのである。よって，あまり清酒，日本酒文化の持つ地域特性というような，文化的視点による地理学における研究はコラム的なものにとどまり，本格的研究は皆無に等しい。

また，生産・消費量ともに日本において最も多く，商品的性格を十分に持つビールに関しては，地理学的研究は非常に少ない。その理由として考えられるのが，同じ醸造酒でありながら清酒と違い，大手メーカーの寡占状態にあること，味が日本人向けに画一的に造られたものであること，日本においての歴史が浅いなどといったことから，地域特性を見出しにくいためではないかと考える。しかし最近では地ビールの生産についても話題になっており、研究例は一件しか見当たらなかったが，まだまだ研究の余地はあると思われる。

日本独自の酒といえば，焼酎もそうであり，最近において生産量が清酒よりも上回っているのに対し，これもまた研究例が少ない。理由として考えられるのが，連続式であればどの地域でも生産が可能であり，単式の生産は九州地方にほぼ限られているなどといった理由から，地域特性を見出しにくいのではないかと考えられる。しかし消費の面では，時吉・中村（2004）の研究において連続式，単式ともに全国の消費が卓越した県の分布における，その嗜好性と理由について研究されているように，地域特性ということであれば，このように生産だけに偏る理由もなく，消費の面からも十分追及可能であると考えられるが，あまり関心は寄せられていない。

意外にも清酒の次に研究例が多かったものが，ワイン

である。その理由として考えられることが原料立地型産業であることと，世界各地で造られている歴史の古い酒であることである。また，日本のワインは主に山梨県の事例を中心に研究されており，その町おこし事業に着目したものが多い。よってワインそのものより，地場産業研究の一環として考えられるものが多い。そのとらえ方から，ワインがいまだ日本人にとって，ビールに比べて定着しきれていない様子がうかがえる。

その他に関しては，先述したように世界中の地酒の地誌的な研究例はあるものの，網羅されているわけではない。また，酒場に関してや各地域の総合的な生産・消費パターンについてなどもあるが，まだまだ研究蓄積はなされておらず，発展の可能な分野であると考えられる。

３．研究者別の考察

文献リストから見る限り，主に一定のテーマで研究を続けている研究者に関しては，青木，寺谷，八久保，松田の４人があげられる。

青木の主な研究テーマは，近世・近代の関東圏，特に埼玉県を中心とした酒造業についてである。なかでも酒造業の盛衰要因について，流通や市場についてだけでなく，酒造家の出身地に注目し，その違いを比較することによって盛衰の差を明らかにした研究（青木，1998）が特徴的である。そしてその研究中で，必ずしも客観的経済合理性に基づくのではなく，同一環境におかれた酒造家でも，経験的・文化的諸要素によって異なる行動を起こすと述べ，経済地理でありながら文化的・生態学的アプローチの必要性も示唆しているところが非常に興味深い。

寺谷は主に日本やアフリカの酒文化について書かれたものが多い。特にアフリカの現代における酒文化（寺谷，1997, 2006）や伝統酒の文化（寺谷, 1992）に関しては，外国の酒の研究でもヨーロッパやアジアに偏りがちな中で非常に貴重な研究といえる。そして日本の酒文化についても，日本におけるワインの生産・流通・消費，統計からみる都道府県の地域性を読み取った飲酒風土の考察など，あまり主流としては扱われないテーマを焦点に当てており，蓄積の少ない地理学における酒の研究を補完するものといえる。

八久保は清酒・焼酎の酒造業について研究を行っている。なかでも，地理学の中では数少ない焼酎の研究をしており，本格焼酎産地の産地化の要因について（八久保，1998）や，市場の構造変化（八久保，1996）などに注目している。そして清酒・焼酎両方の研究に共通して見られるのが，主に企業の市場などにおける行動について焦点を当てていることである。その行動を検討することにより，市場構造の変化や，市場特性，地域特性を明らかにしている。会津若松産地を対象にした酒造業近代化の成長過程についての研究（八久保，2007）では，地方酒造業が地域独自の清酒生産を基礎づけているのは非合理企業行動であり，またそれが非経済合理的生産を継続する要因でもあることを述べている。

松田は初期では酒造出稼ぎ労働者について，後期は清酒の流通についての研究がなされている。初期の研究については，酒造出稼ぎ労働力について研究は地理学でも少数ではあるが，ミクロな労働供給側の考察にとどまっていることを指摘し，どの論文においても労働市場に焦点を当て，その中で酒造出稼ぎ労働者が労働市場の中や農村就業構成のどこに位置付けられているかという分析が行われている（松田，1978，1981）。最近の研究では清酒業の地場産業衰退から，活性化のために新たな展開が必要であり，さらに地理学では酒造業の流通に関する研究が少ないことを指摘し，卸問屋の系列化を明らかにすることで現状を示している（松田, 2004）。結論として，そこでは清酒業活性化に必要であるのは，行政などの上からの政策ではなく自立型具体的政策が必要であることを述べている。

これらの研究者は同じ酒類の場合でも，それぞれ異なった視点をもって研究を続けているが，大きな分野からいえば，経済に偏りがちである。しかしまだまだ蓄積の少ない地理学の酒の研究の方向性を示すものとして，大きな影響を与えていると考えられる。

４．全体の考察

まず，全体を通して見ると，あまり酒に関する研究例が少ない地理学においても，コンスタントに研究の発表はなされている。しかし一定の研究を続けているものは少なく，分野は様々で繁雑的な印象を受ける。特に発表されている論文は，コラム形式のものも多く，余計にそのような印象が強い。

そのなかでも日本の独自の酒であるためか，やはり清酒に関する研究が多く，とくに経済学的視点による清酒

造業に関する研究が多いという傾向がみられる。そして生産量の多いビールや，近年清酒の生産量を上回った焼酎などの研究は少なく，発泡酒や第三のビールなどについての研究はみあたらなかった。その反面，生産量も消費量も少ないワインは，日本において地域活性化を担うものとして多く取り上げられている。これらの理由として，研究対象の多くが酒造側であり，あまり販売店や消費者側の方には目を向けられていないことに関係すると思われる。現在は酒造業界全体の生産量も落ち込み，人々の消費自体も落ち込んでいる。酒造業の見直しとして，各地域における形成要因や構造の分析も必要なこととは思われるが，人々の消費行動・嗜好の地域性の分析も，今後はさらに必要となってくるのではないであろうか。

Ⅳ．結論

以上の分析から日本において酒に関する地理学的研究の特徴や傾向として，次のことを指摘することができる。

①全体的に本格的な研究の蓄積自体が十分ではなく，分散的である。その中でも主体的な傾向として導き出せるのが，清酒の経済学的視点による酒造業の形成要因，構造，出稼ぎ労働者といった，清酒製造業に関する研究であるということがわかった。

②経済学的視点によるものは多いが，文化人類学的視点からの研究は少なく，世界の地酒の地誌的な研究はなされているものの，わずかである。これにより，現代において酒は文化的産物としてより，経済的産物として見られ，その商品的価値に関心が寄せられていることがわかる。

③売り上げの多いビールや，生産量をのばす焼酎はあまり研究の対象とはされていないように，酒類別にみても清酒に研究が偏りがちである。

④一定のテーマによる研究蓄積を行っている研究者も少なく，対象も酒造側に偏っており，まだまだ発展の余地がある。

酒そのものの研究も少ないことながら，経済学的視点における研究への偏りが，今回の調査では見受けられた。さらにその多くの対象は酒造側であり，あまり販売店や消費者側の方には目を向けられていないことがわかる。しかし酒というものは，様々な分野に関わる学際的性格がある。清酒造業において，必ずしも経済合理的行動を行うものではなく，その非合理的行動によって地域特性が生まれているとして指摘されているように（八久保，2007），酒に関する様々な事象を明らかにするには酒に対する人の行動や営み，すなわち消費行動や嗜好性などの文化的アプローチも視野に入れなければならないのではないか。

そもそも，地理学の目的の一つは，地表面の自然的な諸現象の変化を地域的な差においてとらえていくと同時に，その自然と関係を持ちつつ生活を営んでいる人間の文化のパターンを地域の自然との関係において見出し，その関係を歴史的に研究し，他地域と比較しながら，その関係を歴史的に研究し，他地域と比較しながら地域性を明らかにし，その発展を研究することにある（徳久，1995）。すなわち，もともと古代における文化の産物である酒は，その文化面を明らかにしたうえでなければ，現代の酒造業などの経済的視点による事象を明らかにしていくことは困難なはずである。今後の地理学における酒の研究の発展には，このような文化的アプローチをさらに取り入れた研究が不可欠であると考える。

今後の課題としては，本稿ではCiNii，地理学関係雑誌論文目録の検索のみを対象としたため，他分野の研究については検討することはできなかった。隣接分野の研究成果をレビューすることによって，酒に関する地理学的研究の課題や研究の方向性がよりはっきり見えてくる。様々な分野による活発な研究が期待される。

文　献

石毛直道（1998）：酒と飲酒の文化。石毛直道編『論集酒と飲酒の文化』平凡社。25-85。

徳久球雄（1995）：『食文化の地理学』学文社。271P。

（その他の文献については，表２を参照されたい）

表1　酒に関する研究年表

酒類	清酒				ビール				焼酎				ワイン				その他			
年	番号	著者名	分野	形態	番号	著者名	分野	形態	番号	著者名	分野	形態	番号	著者名	分野	形態	番号	著者名	分野	形態
1951	S1	川本 忠平		●																
1968																	O1	品田 毅		●
1976	S2	大塚 力	文化	○																
	S3	井之口 章次	文化	○																
	S4	水津 一朗	文化	○																
	S5	坂口 謹一郎	文化	○																
1978	S6	松田 松男	社会、経済、農	●																
	S7	松田 松男	社会、経済	●																
	S8	杉原 和之	地理教育、経済	●																
1979	S9	山中 進		●																
1980	S10	井上 寛和		●																
	S11	白石 太良		●																
1981	S12	松田 松男	経済、歴史	●																
	S13	太刀掛 初栄	経済・歴史	○																
1982									C1	濱園 奈穂美		○								
1983													W1	菊地 俊夫	経済、農	●				
													W2	多田 統一	経済	●				
1984	S14	小林茂		●									W3	佐々木博	経済、農、文化	●	O2	山下 高明	文化、民俗、歴史	○
	S15	井上 寛和	農、経済	●																
1988					B1	江波戸昭	経済、文化	●									O3	相沢隆		●
					B2	日野正輝	経済、	○					W4	多田統一	経済、	○	O4	水津一朗	歴史、文化	●
													W5	小林孝一	農、経済	○				
													W6	高山隆子	政治、経済	○				
1989	S16	松田松男	経済、歴史	●																
	S17	石川健次郎	歴史、経済	●																
	S18	上村雅洋	歴史、経済	●																
	S19	篠田壽夫	歴史、経済	●																
	S20	中村隆英	歴史、経済	●																
1990													W7	矢ケ崎典隆	農、経済	○	O5	森淳	文化、醸造	●
													W8	菊地 俊夫	農、経済、文化	○				
													W9	石川雄造		●				
1991	S21	山本一雄	社会、歴史、経済	●									W10	佐々木博	経済	●	O6	小長谷有紀		●
1992																	O7	寺谷 亮司	文化、経済	○
1993	S22	八久保厚志	経済	○													O8	崔吉城		●
	S23	工藤陽明他	経済、醸造、農	●																
1994	S24	八久保厚志	経済、歴史	●	B3	長谷川 善和他	考古	○												
1995	S25	三浦京子	社会、歴史、経済	●																
	S26	新保 正夫	経済、歴史	○																
	S27	工藤 陽明	経済、歴史	○																
1996	S28	青木 隆浩	経済、歴史	○	B4	向後 武	経済・文化	○	C2	八久保厚志	経済、歴史	●	W11	多田統一	農、経済	●	O9	藤岡ひろ子	社会、政治	●
					B5	箸本健二	経済	●									O10	中野高行	歴史、民俗、考古	●
1997	S29	西邑雅子他	経済	●									W12	寺谷亮司		●	O11	石井智美	醸造、文化、言語、歴史	●
	S30	高木亨	経済、社会	●									W13	大山 修一	文化、醸造	○				
	S31	伊藤 博幸		○																
	S32	青木隆浩	歴史、経済	●																
1998	S33	青木隆浩	醸造、文化ー生態地理、経済	●					C3	八久保厚志	経済	●								
1999	S34	青木隆浩	歴史、経済	●	B6	堤純	経済	●	C4	田代雅彦	経済	●					O12	呉羽正昭	経済・文化	●
	S35	松田松男		●																
	S36	寺谷亮司	経済、文化	●																
	S37	八久保 厚志		○																
	S38	八久保 厚志		○																
2000	S39	青木 隆浩	文化、経済	○					C5	野間 重光	経済	○	W14	猪瀬 利幸	文化、農、経済	○	O13	江川 式部		●
	S40	青木隆浩	経済、歴史	●																
	S41	青木隆浩	歴史、経済	●																
2001					B7	丹治雄一	経済、歴史	●					W15	佐々木 博	経済	○	O14	岡本勝	歴史、社会	●
					B8	柴田和徳	経済、歴史	●												
2002	S42	青木 隆浩	経済、歴史	○									W16	土屋 幸三	農、経済	○				
													W17	鈴木 重男	農、経済、政治	○				
													W18	寺谷亮司	経済、歴史	●				
													W19	加藤 好武	農、経済	○				
													W20	内山 幸久	農、経済	○				
2003	S43	長谷川 尚志	社会、経済	●	B9	柳井 雅也他	経済、歴史	●					W21	岡本 明	歴史、農	○				
2004	S44	松田 松男	経済、歴史	●													O15	時吉修他	文化、経済、歴史	●
2006	S45	関 千里	経済、	●													O16	寺谷 亮司	文化、経済、	○
2007	S46	八久保 厚志	経済、歴史	●					C6	大谷 美穂子		○								
2008	S47	塩見 侑吾	経済、歴史	●													O17	八久保 厚志	文化、経済、醸造、歴史	○
	S48	伊賀 聖屋	経済	●																

（著者作成）

注1)　Sは清酒、Bはビール、Cは焼酎、Wはワイン、Oはその他。
注2)　●は学会誌発表論、○はその他（要旨、コラムなど）。

表２　文献リスト（番号は表１に対応している）

番号	著者名	年	論文名	雑誌・出版社名	巻号	ページ
S1	川本 忠平	1951	南部酒造出稼の質的吟味論（其の三）- 農家家族構成員よりみた杜氏勞働 -	岩手大學學藝學部研究年報	2-1	157-166
S2	大塚 力	1976	酒と肴 (酒<特集>)	地理	21-12	36-46
S3	井之口 章次	1976	酒と祭儀 (酒<特集>)	地理	21-12	29-35
S4	水津 一朗	1976	酒と文化圏 (酒<特集>)	地理	21-12	19-28
S5	坂口 謹一郎	1976	酒と風土 (酒<特集>)	地理	21-12	13-18
S6	松田 松男	1978	新潟県の酒造出稼ぎ地域における通勤兼業の進展	経済地理学年報	24-1	32-50
S7	松田 松男	1978	我が国における酒造出稼ぎの需給分布とその変化	地理学評論	51-11	804-813
S8	杉原 和之	1978	校下の地場産業--伏見の酒造業(対話・地理教材研究)	地理	23-8	157-162
S9	山中 進	1979	秋田県湯沢市における酒造業・製材木工業の地域的展開(明治期～昭和初期)	東北地理	31-3	147-155
S10	井上 寛和	1980	酒米合同販売と地主制--自由流通米期の北摂の事例	人文地理	32-4	351-366
S11	白石 太良	1980	明治・大正期における酒米の合同販売と集落--大阪府北部の事例から	歴史地理学	111	16-26
S12	松田 松男	1981	丹波・篠山町における酒造業労働力の変容	地理学評論	54-8	405-422
S13	太刀掛 初栄	1981	続・地場産業の町--西条の酒づくり	地理	26-10	112-119
S14	小林茂	1984	魚崎郷・御影郷・西郷-西三郷の酒造業	神戸の地理		88-92
S15	井上 寛和	1984	福井県における酒米生産の様相	経済地理学年報	30-3	211-224
S16	松田松男	1989	最近における酒造業の地域構造に関する若干の考察	経済地理学年報	35-3	65-78
S17	石川健次郎	1989	伏見酒造業の発展	社会経済史学	55-2	54-68
S18	上村雅洋	1989	灘酒造業の展開	社会経済史学	55-2	12-31
S19	篠田壽夫	1989	知多酒造業の盛衰	社会経済史学	55-2	32-53
S20	中村隆英	1989	酒造業の数量史　ー明治ー昭和初期	社会経済史学	55-2	93-121
S21	山本一雄	1991	西但馬地方における酒造出稼ぎの変容	立命館地理学	3	31-46
S22	八久保厚志	1993	清酒業の企業空間再編	経済地理学年報	40-2	35-51
S23	工藤陽明 大嶽幸彦	1993	新潟県上越地方における清酒製造業の実態	兵庫地理	38	69-81
S24	八久保厚志	1994	大正期における会津酒造業の市場展開　ー東京市場進出過程を中心に	経済地理学年報	40-2	35-51
S25	三浦京子	1995	雇用労働力からみた近世知多郡醸造業の地域的特性	地理学報告	81	1-17
S26	新保 正夫	1995	石川県酒造業の地域的展開(平成4年度卒業論文要旨)	金沢大学文学部地理学報告	7	73
S27	工藤 陽明	1995	静岡県における清酒製造業の地域的性格	日本地理学会予稿集	47	324-325
S28	青木 隆浩	1996	創業者の出身地別にみた埼玉県酒造業の形成過程	経済地理学年報	42-3	204-205
S29	西邑雅子 松田隆典	1997	伏見酒造業の展開と産地構造	新地理	45-3	19-27
S30	高木亨	1997	長岡地域の清酒醸造業における労働力の雇用形態の変化	立正大大学院年報	15	139-154
S31	伊藤 博幸	1997	<地図で見る秋田>神岡町の酒造業と誘致企業	秋田地理	17	18-19
S32	青木隆浩	1997	近世・近代における埼玉県清酒業の形成過程	経済地理学年報	43-2	1-17
S33	青木隆浩	1998	近代における埼玉県清酒業者の立地選択と酒造技術	地学雑誌	107-5	659-673
S34	青木隆浩	1999	戦時統制下の清酒業における生産統制と企業整備　ー埼玉県、栃木県の事例を中心に	歴史地理学	41-2	1-22
S35	松田松男	1999	戦後日本における酒造出稼ぎの変貌	古今書院		316
S36	寺谷亮司	1999	わが国の日本酒風土	統計	50-7	1-8
S37	八久保 厚志	1999	戦前期朝鮮における清酒生産	日本地理学会発表要旨集	55	218-219
S38	八久保 厚志	1999	戦前期台湾における酒造業の展開	日本地理学会発表要旨集	56	176-177
S39	青木 隆浩	2000	解説 地域資源の有効活用と酒 (地理の研究(163)特集 食と衣の地理学)	歴史と地理	538	12-16
S40	青木隆浩	2000	明治・大正期における酒造技術の地域的伝播と産地間競争の質的変化	地学雑誌	109-5	680-702
S41	青木隆浩	2000	明治期における酒造組合の形成と組織的変容　ー埼玉県を中心として	人文地理	52-5	1-22
S42	青木 隆浩	2002	19世紀の歴史空間--新しい「日本」地誌(7)品質の均質化と産地の序列化--清酒市場の全国化と競争戦略	地理	47-6	94-101
S43	長谷川 尚志	2003	秋田県山内村における酒造出稼ぎ者の労働実態	秋大地理	50	7-12
S44	松田 松男	2004	最近のわが国における清酒流通の変容に関する一考察	史苑	64-2	111-126
S45	関 千里	2006	伝統産業にみる人材戦略--山形県酒造業の事例	早稲田大学教育学部学術研究. 地理学・歴史学・社会科学編	55	1-13
S46	八久保 厚志	2007	酒造業における経営近代化の嚆矢とその帰結 : 会津若松産地における会津酒造株式会社の事例	人文学研究所報	40	23-32
S47	塩見 侑吾	2008	近畿における近代酒造業の変遷--灘五郷を中心に	兵庫地理	53	33-42
S48	伊賀 聖屋	2008	清酒供給体系における酒造業者と酒米生産者の提携関係	地理学評論	81-4	150-178
B1	江波戸昭	1988	世界のビールのみある記	地理	33-8	56-65
B2	日野正輝	1988	ビールの生産と流通	地理	33-8	46-55
B3	長谷川 善和 鈴木 省二 李 栄 谷 祖綱	1994	ゴビ砂漠の恐竜と日本のビール	横浜国立大学教育学部野外教育実習施設研究報告	12	61-69

B4	向後 武	1996	世の中と地理(18完)■ビ-ルが社会を変える	地理	41-3	104-108
B5	箸本健二	1996	情報ネットワーク化とビール工業における生産・物流体制の変化　ーキリンビールを事例として	経済地理学年報	42-1	1-19
B6	堤純	1999	ビール業界における近年の動向	統計	50-7	9-15
B7	丹治雄一	2001	大日本麦酒の経営と販売網　ービール業成長期下の経営活動と特約販売網の整備	社会経済史学	67-3	3-26
B8	柴田和徳	2001	日本における地ビール産業の地域的展開	地域地理研究	6	15-29
B9	柳井 雅也 于 殿文	2003	中国におけるビール産業の発展と立地 : 青島ビールを事例として	富山大学紀要. 富大経済論集	49-1	183-217
C1	濱園 奈穂美	1982	薩摩半島南部における焼酎製造業の地誌学的考察	お茶の水地理	23	44
C2	八久保厚志	1996	球磨焼酎産地の形成と市場変化　ー近在型工業の成長と存立基盤変化	法政地理	24	36-50
C3	八久保厚志	1998	焼酎産地の形成と企業行動	法政地理	28	11-27
C4	田代雅彦	1999	九州から全国、世界へ広がる本格焼酎	統計	50-7	16-23
C5	野間 重光	2000	焼酎産業の成長メカニズムとWTO時代の課題(西南支部)	経済地理学年報	46-2	217-218
C6	大谷 美穂子	2007	本格焼酎ブームの実体と業界変化 : 宮崎県をモデルにして	お茶の水地理	47	67-68
W1	菊地 俊夫	1983	甲府盆地におけるワインの生産形態と生産組織	経済地理学年報	29-2	88-105
W2	多田 統一	1983	続・地場産業の町--ブドウ酒醸造業の勝沼	地理	28-11	78-84
W3	佐々木博	1984	山形県のブドウ栽培とワイン業	人文地理学研究	8	181-199
W4	多田統一	1988	統計にみる日本の果実酒類　ーワインを中心として	地理	33-8	22-28
W5	小林孝一	1988	山梨県ワイン産業の発展構造	地理	33-8	30-37
W6	高山隆子	1988	ECのワイン政策にみるヨーロッパ統合の進展	地理	33-8	38-45
W7	矢ケ崎典隆	1990	カリフォルニア農業の形成期におけるブドウとワイン	アメリカ・カナダの自然と社会[大明堂]		188-206
W8	菊地 俊夫	1990	ニュ-ジ-ランドの農業スケッチ-8-遅れてきたワイン産地	地理	35-10	127-132
W9	石川雄造	1990	秋田県におけるワイン生産の現状	秋田経済法科大学経済学部経済研究所所報	18	51-68
W10	佐々木博	1991	岩手県大迫町のブドウ栽培　ー新興ワイン産地の事例	地域調査報告	13	23-38
W11	多田統一	1996	ワインによる地域の活性化　ー山梨県を例として	地域研究（立正地理学会）	37-1	30-40
W12	寺谷亮司	1997	南アフリカ共和国のワイン産業	愛媛大学法文学部論集(人文学科	2	175-210
W13	大山 修一	1997	シリ-ズ私が奨める地球の見どころ-17-ザンビア北部ベンバのワイン	地理	42-6	32-33
W14	猪瀬 利幸	2000	資料のコーナー(33)フランスにおけるワインとチーズの生産地とその分布	歴史と地理	538	38-43
W15	佐々木 博	2001	ハンガリーのブドウ栽培とワイン	日本地理学会発表要旨集	59	169
W16	土屋 幸三	2002	山梨のワイナリーの実状 (特集 地ワインと風土)	地理	47-9	29-35
W17	鈴木 重男	2002	ミルクとワインで町おこし (特集 地ワインと風土)	地理	47-9	36-43
W18	寺谷亮司	2002	日本におけるワインの生産・流通・消費	地理	47-6	18-16
W19	加藤 好武	2002	山梨県におけるブドウ生育適地図の作成 (特集 地ワインと風土)	地理	47-9	24-28
W20	内山 幸久	2002	日本のブドウ栽培の展開 (特集 地ワインと風土)	地理	47-9	17-23
W21	岡本 明	2003	第2部 フランス歴史の中のワイン--近世商業社会と政治	地域アカデミー公開講座報告書	2003 (Spr.)	33-61
O1	品田 毅	1968	水・ヴァン・ビール(ヨーロッパ開眼)	地理	13-3	75-81
O2	山下 高明	1984	南アジアのまち・むら・ひと-1-ガンジ-・禁酒・結婚式	地理	29-1	68-73
O3	相沢隆	1988	ドイツ中世都市における酒房の社会的意義について　ー南ドイツの仲間団体との関連を中心にして	歴史学研究	587	16-25
O4	水津一朗	1988	ヨーロッパの「詩の蜜酒」 ービールとワインの物語	地理	33-8	13-21
O5	森淳	1990	モバ族の酒造りと甕について	国立民族学博物館研究報告 別冊	12	679-702
O6	小長谷有紀	1991	モンゴルの夏　ー馬乳酒の季節	地理	36-8	25-31
O7	寺谷 亮司	1992	ケニア共和国ナイロビ市スラム地区の伝統的酒類	季刊地理学	44-4	265-267
O8	崔吉城	1993	韓国社会における飲酒・飲茶の意味	日本民俗学	195	98-109
O9	藤岡ひろ子	1996	神戸酒造地域の被災時における対応　ーとくに水の問題をめぐって	地理学評論	69A-7	547-558
O10	中野高行	1996	新羅使に対する給酒と入境儀礼	ヒストリア	150	139-161
O11	石井智美	1997	馬乳酒をめぐる記述に関する文献的研究	民族学研究	62-1	33-46
O12	呉羽正昭	1999	ヨーロッパの酒類消費と生産の地域的パターン	統計	50-7	24-30
O13	江川 式部	2000	唐朝祭祀における五斉三酒	文学研究論集 文学・史学・地理学	14	187-202
O14	岡本勝	2001	アメリカ社会における酒場の盛衰　ーポストベラム期から全国禁酒法成立まで	広島大学総合科学部紀要1・地域文化研究	27	63-90
O15	時吉修 中村周作	2004	宮崎県域における飲酒嗜好にみる地域性	立命館地理学	16	55-69
O16	寺谷 亮司	2004	モーリシャス共和国のラム・ワイン・ビール産業	季刊地理学	56-3	187-188
O17	八久保 厚志	2008	お酒と地理学 (特集 食卓の地理の話)	地理	53-4	34-42